

実務英語教育における英語スピーチ訓練導入への実践方略

—理容師美容師養成施設での“My Dream”スピーチからの一考察—

清水利宏

Abstract

This paper explores some benefits, and instructional approaches, related to the introduction of English speech practice, especially in the ESP (English for Specific Purposes) educational field. An ESP program offered at a hairdressing college is referred to as an example. One principal benefit, which English speech practice in ESP classes brings out, is to reinforce learners' awareness of their "instrumental need" to learn ESP. An investigation conducted herein shows that in introducing English speech practice in ESP classes, especially at the beginner's English level, instructors are required to deliberate if they need to provide a subtitle and/or supplementary instructions to explain a speech assignment. Whether to offer them, or not, affects how the students express their "instrumental need" to learn ESP, in their own speeches.

キーワード：ESP, speech communication, public speaking, hairdressing

道具的ニーズ, 動機づけ, 目標意識, 理容師, 美容師, 専門学校

はじめに

多様な英語教育現場において様々な教授法が実践される中、オーラル・コミュニケーションを重視した英語教育のアプローチとして「英語スピーチ」(public speaking)が採用されることは珍しくない。英語スピーチを介したプレゼンテーションのトレーニングを通じ、学生は自らの意見を論理的に整理し、眼前の聴衆を相手に分かりやすく話し伝えるコミュニケーション能力を養うことができる。また、みずからの主張や論点を英語で公に語ることは、コミュニケーション能力の向上のみならず、三熊(2003)のいう「社会的インターフェイス装置」¹⁾としての役割を担い、学生の主張内容に対する発表者自身の内面的な意識強化が併せて期待できると思われる。こうした点から、英語教育におけるスピーチ訓練の導入には一定の意義が存在する。しかし、(英語スピーチを専門とした授業環境は例外として)吉田(1997)が指摘するように、「授業で生徒にいきなりスピーチをさせることは難しい。それだけの英語力が最初からある生徒ばかりならいざ知らず、普通はそうはいかない。もっと簡単なところから自分につい

て話す練習が必要なのである」²⁾。こうした現状のもと、英語スピーチ訓練の導入に際して求められる要素のひとつが、学習者自身が抱く英語学習の動機（学習ニーズ）に合致した基礎的なスピーチレッスンの実践方略であると考えられよう。本稿は、実務英語教育環境、とりわけ理容師美容師養成施設（※以下「養成施設」という）での ESP 教育環境における英語スピーチの導入事例を採り上げ、実務英語学習の「道具的ニーズ」を抱える学習者の動機特性を踏まえた、英語スピーチ訓練の実践に関する一考察をまとめたものである。

本論ではまず、実務英語教育と英語スピーチの特徴的な性質を概観し、両者における教育上の接点を整理する。その上で、実際に養成施設で実施された英語スピーチ訓練の取り組みを考察する。英語スピーチの実践事例の考察にあたっては、「作成にあたっての指示の出し方や、具体的な副題の有無」と「その結果もたらされるスピーチ発表の内容」との関連性の傾向を明らかにすることで、実務英語教育における英語スピーチ訓練導入のための、より効果的な実践方略を探る。

1. 実務英語教育と英語スピーチ

1.1. 実務英語教育における道具的ニーズとスピーチ

本稿での「実務英語教育」とは、いわゆる“ESP (English for Specific Purposes)”の指導環境であり、学習者に共通する実務上の「ディスコース・コミュニティ (discourse community)」を対象とした英語教育を指す。実務英語を学ぶ学習者に共通する特徴としては、学習者が抱える「道具的ニーズ」の存在が挙げられる。彼らには、目前または近い将来に、英語を道具（媒介）として実務を遂行するための「道具としての英語」を学ぶ共通性がある。何のために英語を学ぶのかという目的や動機が明確な実務英語学習者に対し、英語スピーチのような「英語を媒介として自らの意思を発表する機会」を提供することは、学習者自身の道具的ニーズを再認識させる上で重要な意味を持つと思われる。Ellis (1985) は“when learners have a strong instrumental need to learn a L2, they will probably prosper.”³⁾と述べているが、実務直結型の道具的ニーズ (instrumental need) と学習動機の存在は実務英語教育における特性であり、そこでの英語スピーチ導入に際しても、この特性を引き出し、強化することをひとつの導入課題として認識しておきたい。

本稿における英語スピーチ訓練の導入事例では、“informative speech”や“persuasive speech”といったスピーチの種別やレトリック等、個々の構成手法の指導にはあえて重点を置いていない。それは、先の「道具的ニーズ」を土台とし、実務英語教育環境における「発表者の主張内容を（英語を媒介として）公に発表する public speaking の行為そのものの意義」に重点を置くためである。英語スピーチを実際の授業に導入する一般的な意義について、野村 (2002) は、Grice & Skinner (2001) のいう「public speaking を身につける 3つの意義——個人としての意

義・職業人としての意義・社会的意義⁴⁾を引いた上で、「スピーチを通じた自己啓発」や「スピーチ活動による自己発見⁵⁾」といった要素を示している。スピーチの種別や目的にかかわらず、英語スピーチを通じて public speaking の経験に触れることは、英語によるコミュニケーション能力を高めるためにも、また学習者自身の学習意識の強化においても、プラスの効果が期待されるはずである。

1.2. 理容師美容師養成施設における ESP 教育とスピーチ

今回、調査対象とした実務英語教育の実践現場は、厚生労働省認可の養成施設である。日本における理容美容業界の養成課程では、理容師法・美容師法の法改正を受け、平成10年度より2年制への教育拡充が図られた。それを機に、多くの養成施設において実務英語講座が開講されるようになった。以来、筆者は旭理容美容専門学校⁶⁾(※以下「旭校」という)を勤務校(非常勤)とし、理容業・美容業を対象業種とした実務英語指導に携わっている。

養成施設における実務英語教育(ESP教育)の特徴的傾向としては、「道具的ニーズの明確さ」が挙げられる。英語を使って理容業・美容業に携わるという「道具的ニーズ」が明確な分だけ、英語学習に対する学生の意識や関心は総じて高くなる。養成施設での英語学習動機に関する学習者の声として Otani (2003) が紹介した “... because they want to study hairstyling skills abroad, or because they want to find employment at salons where many foreigners visit”⁷⁾ は、養成施設の学生が認識する、代表的な道具的ニーズの一例であると理解できる。

一方で、そのような英語学習への高い関心や意識の度合いに反し、養成施設での実務英語教育環境では、学生自身のいわゆる「英語力」が低くとどまる傾向にある。2000年に実施された大谷(2001)の調査結果によれば、大谷の勤務校(養成施設の機能を持つ美容系短大)では「英語教科において、学生の学力の低さと、それとは対照的な関心・意欲の高さが浮き彫りになった⁸⁾」との報告がある。また、旭校における実務英語科目の受講生を対象に、筆者が実施した2005年度の意識調査においても、大谷の調査報告と概ね同様の傾向が見られた。ゆえにこうした相反関係は、養成施設での実務英語教育をとりまく共通課題であるとも推測される。このような「意識レベル」と「学力レベル」との隔たりを埋めるためのひとつの試みとして、旭校で導入されているのが、英語スピーチ訓練による public speaking の実践である。

旭校における英語スピーチの取り組みは、同校で初めて実務英語科目が開講された平成10年度にさかのぼる。スピーチの仕様や実施方法には幾度かの改善が重ねられ、実施形態は現在の「10行スピーチ」というフォーマットに落ち着いた。実施頻度は不定期である。学習者の英語運用レベルを考慮して、特にスピーチの構成要素(speech structure)に細かな規定は設けていない。テーマとなるトピックについては指導者がその都度指定し、「家族・趣味・友人」等の身近な話題や、「未来の夢・理美容業界の自分」のように学習者の職業領域との接点を求める題材を織り交ぜて実施する。中でも、本稿で採り上げる“My Dream”というテーマの英

語スピーチについては、将来の実務領域に触れる具体的な発表が期待される意味において、学習者自身の職業意識強化や、英語を学ぶ道具的ニーズの意識強化を目的とした位置づけにある。これは Otani (2003) が、養成施設における学習者の高い学習意識の“活用”を示唆した“we can use their dreams for encouragement.”⁹⁾の論点にも沿うものである。

もっとも、スピーチの題目選定については、近江 (1996) が「“My Father”などの phrasal topics は避けさせる」¹⁰⁾と指摘するように、具体性を伴った logical writing が求められる「英語スピーチ」の課題に、“My Dream”のような漠然としたテーマを与えることには賛否がある。なぜなら、こうした広いテーマでは学生が具体的な発表内容を絞りきれず、将来の希望を箇条書きで列記するだけで終わったり、養成施設の学生に共通する「私は理容師・美容師になりたい」という普遍的な内容の羅列になったりという結果が懸念されるからである。しかし一方では、テーマが漠然としている分だけ、学生には自由な表現の“余地”が与えられるという利点もある。“My Dream”というテーマを例に挙げれば、そこには「なぜそのような夢を描くのか」や「英語をどう生かすのか」といった、より具体的な主張を「自由に語るための余地」が存在する。学生の英語力が必ずしも高いとはいえない養成施設での英語スピーチ訓練の導入にあたっては、こうした“余地”を生かしたスピーチを学生が完成させられるように、指導上の配慮が必要になると思われる。

では、実務英語教育において英語スピーチの課題を与える際、この“余地”の使い方（いわばスピーチの組み立て方）のヒントを与えた場合と、与えなかった場合では、学生が発表するスピーチの内容にどのような違いが見られるのだろうか。また、“My Dream”という漠然としたテーマに“Hairstylist”という具体的な副題を付した場合、そのスピーチ内容はどのような変化傾向を示すのだろうか。これらの問いを「学習者の道具的ニーズの強化」という視点から明らかにし、実務英語教育における英語スピーチ訓練導入のための留意点を探るのが本稿の目的である。

2. 英語スピーチ導入事例の比較

2.1. 比較目的・比較事例

養成施設での実務英語教育における英語スピーチの実践事例について、「同一のテーマで、実施条件が異なる」次の3つのケースを採り上げる。それらの実践結果として発表されたスピーチの内容を比較することで、実践事例ごとの実施条件と、それぞれのスピーチの特徴との関連性を見る。

各実践事例A～Cにおける英語スピーチの実践に際しては、“My Dream”というテーマでのスピーチ発表が、全学生にとって「初めての機会」となるように配慮した。（同テーマでのスピーチは初めてであるが、別テーマでの「英語スピーチ訓練」自体は、全学生が事前に経験済

みである。) 対象となる学生個々の英語力には大きくばらつきがあるものの、実践事例A～Cの対象グループを構成する学生の平均的な英語力や学習動機の傾向には特筆すべき相違は見られない。

2.2. スピーチ仕様

実践事例の対象となるスピーチは、「10行スピーチ」という訓練様式を用いて実施した。「10行スピーチ」とは、与えられたトピックについて10行～15行の範囲でショートスピーチを作成し、クラスのグループ内で個人発表する public speaking の練習スタイルである。

スピーチ課題の告知に際し、指導者は毎回新しいスピーチ用紙(次頁参照)を配布する。学生はその用紙に、専攻科・学年・クラス・学生番号・実施回数・実施日・名前・トピックをその場で記入し、指定の実施日までに自宅で内容を完成させる。また、発表当日までに、あらかじめ音読練習を済ませておくことが求められる。

スピーチそのものの文章量は僅かであるため、学生の精神的負担は少ないが、少ない文章量で独自性を表現するためには、相応の構成力が求められる練習となる。

2.3. 比較考察の方法

今回の比較考察にあたっては、本稿冒頭で述べた実務英語学習に対する「道具的ニーズの反

◇事例A

テーマ	“My Dream” (副題なし)			
課題提示における指導事項	テーマのみを説明し、特別な助言は提供せず。			
被験者 (人数・所属・性別・実施時年齢)	2年次生29名(2005年3月卒業生) 所属:新理容科2名・美容科27名 2004年度2年生スピーチ・年齢構成			
	年齢	男性	女性	総計
	17	1		1
	18	2		2
	19	4	15	19
	21	1		1
	22	1		1
	23		1	1
	24	1		1
	25	2		2
27	1		1	
総計	13人	16人	29人	
2004/4/26 現在				
実施日	2004年4月26日			

◇事例B

テーマ	“My Dream” (副題なし)				
課題提示における指導事項	課題の提示時に、スピーチを構成するための参考知識として、一般的な疑問文で使われる「5W・1H」の要素を解説。自分自身の主張を列記する前に、5W1Hを使って自らに問いかけを試みるように助言する。				
被験者 (人数・所属・性別・実施時年齢)	1年次生27名(2007年3月卒業予定者) 所属:新理容科3名・美容科24名 2005年度1年生スピーチ・年齢構成				
	年齢	男性	女性	総計	
	16		1	1	
	18	5	7	12	
	19	3	4	7	
	21		2	2	
	22		3	3	
	30	2		2	
	総計	10人	17人	27人	
	2005/9/26 現在				
実施日	2005年9月26日				

◇事例C

テーマ	“My Dream — Hairstylist”																																								
課題提示における指導事項	「事例B」に同じ.																																								
被験者 (人数・所属・性別・実施時年齢)	2年次生24名 (2006年3月卒業生) 所属：新理容科4名・美容科20名 2005年度2年生スピーチ・年齢構成 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <thead> <tr> <th>年齢</th> <th>男性</th> <th>女性</th> <th>総計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>18</td><td>1</td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>19</td><td>4</td><td>8</td><td>12</td></tr> <tr><td>20</td><td>4</td><td>2</td><td>6</td></tr> <tr><td>22</td><td></td><td>1</td><td>1</td></tr> <tr><td>25</td><td>1</td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>33</td><td></td><td>1</td><td>1</td></tr> <tr><td>36</td><td></td><td>1</td><td>1</td></tr> <tr><td>39</td><td></td><td>1</td><td>1</td></tr> <tr><td>総計</td><td>10人</td><td>14人</td><td>24人</td></tr> </tbody> </table> 2005/9/26 現在	年齢	男性	女性	総計	18	1		1	19	4	8	12	20	4	2	6	22		1	1	25	1		1	33		1	1	36		1	1	39		1	1	総計	10人	14人	24人
年齢	男性	女性	総計																																						
18	1		1																																						
19	4	8	12																																						
20	4	2	6																																						
22		1	1																																						
25	1		1																																						
33		1	1																																						
36		1	1																																						
39		1	1																																						
総計	10人	14人	24人																																						
実施日	2005年9月26日																																								

「映レベル」に重点を置く。理容師・美容師として実務英語を学ぶ動機、目的、およびそれに関連する国際的視点など、発表者の主張と実務英語学習との接点が再認識されうる要素がどれだけスピーチに含まれるかを調査し、その傾向を量的・質的の両面から考察する。

量的な比較考察に際しては、国際性を伴う主張や英語学習に関連する主張を述べた学生数や記述文の総数をカウントし、それらの数値を基準にして相違点の傾向を見る。また、質的な比較考察としては、先の量的比較の対象となった記述文を原文通

りに抜粋し、その構成上の傾向を比較する。原文抜粋にあたっては、スペルミスや文法ミスも含めてそのまま忠実に転載するとともに、その学生が意図したと思われる正しい英文表現を、できる限り原文に近い形で付記した。これにより、養成施設の学生が記す「道具的ニーズの英語表記」の誤りの傾向を見ることができる。

先の「実践事例A～C」の表で記したように、ここでの比較考察は3つの実践事例が全く同じ学生グループを対象としたものではない。そのため、比較考察の結果はいわゆる「同一グループを対象とした3種の比較結果」にはならないが、「全学生が初めて取り組むトピックに対する反応」が比較考察できる点をここでは重視したい。

10行スピーチ原稿用紙 English Conversation Course at ASAHI

容科 年 組 番 第 回

Date: _____ Name: _____

Today's Topic

⇒ _____

Partner's Review Today's Partner is :

2.4. 実施結果

実践事例A～Cそれぞれについて、全対象学生のスピーチの中から、実務英語学習の道具的ニーズに触れていると思われる文章を抜粋し、原文のまま転載する。英語学習や国際性との関連記述を含まないスピーチに関しては、対象サンプルとして採り上げず、本項にも抜粋しない。

サンプル番号（各抜粋文見出しの「A (B/C) - 数字」）は、A～Cが実践事例の種別を示し、続く数字は「道具的ニーズ」に関連する記述を伴った学生の通し番号（順不同）を表す。下線（波線）を付した箇所は、抜粋された文章が「英語学習の道具的ニーズ」との関連があると判断された根拠になったキーワードである。文法上の誤りを含む文章には文末に「*」を付し、次行「→」以降のイタリックス書体で、学生が本来意図したと思われる添削済の英文を記載した。文末の「(?)」は、学生の意図が正確に把握しがたい文章を指している。

2.4.A. 事例A 原文抜粋 — タイトル “My Dream”, 副題なし, 解説なし.

(番号) (文章内容)

A-1. I want to speak English and French.

I want to go to foreign country.*

→ *I want to go to foreign countries.*

A-2. I want to take a trip many country.*

→ *I want to make trips to many countries.*

A-3. I'm going to go to London when I'll finish the school.*

→ *I'm going to go to London when I finish school.*

I really want to work at foreign country.*

→ *I really want to work in a foreign country.*

I wanna use English for my job.

A-4. I want to be a speak English.*

→ *I want to be an English speaker.*

I want to be a travel world.*

→ *I want to travel around the world.*

A-5. My dream is to work in foreign country.*

→ *My dream is to work in a foreign country.*

I want to learn many things there. (※上記の文章に後続して記述された文)

A-6. I want to speak English.

A-7. I want to go New York.*

→ *I want to go to New York.*

I want to love of world.*(?)

→ *I want to love the world.*(?)

A-8. I want to be able to speak English.

I want to wark in the world.*

→ *I want to work in the world.*

People in the world, I want to see, beauty by my skill, and make happy.*

→ *I want to see many people in the world, and make them beautiful with my skills, and make them happy.*

A-9. The world a trip is all sorts of people hair cut a beautician.*^(?)

→ *I want to be a beautician who travels in the world to offer haircuts to many people.*^(?)

A-10. I want to travel around the world when I have the time.

I want to see different cultures.

A-11. I want to go foreign country.*

→ *I want to go to foreign countries.*

A-12. I want to go to many countrys. *

→ *I want to go to many countries.*

A-13. I have many house, L.A, N.Y, LONDON, PARIS.*

→ *I [will / want to] have many houses in L.A., N.Y., London and Paris.*

2.4.B. 事例B 原文抜粋 — タイトル “My Dream”, 副題なし, 5W1H 解説あり.

(番号) (文章内容)

B-1. I want to be a girl speaking English.*

→ *I want to be an English-speaking girl.*

B-2. I want to go abroad.

B-3. My dream is hairdresser of world No.1.*

→ *My dream is to be the number-1 hairdresser in the world.*

B-4. I want to speak English.

B-5. I want to be able to speak English.

But, English is too difficult for us to speak.*

→ *I want to be able to speak English, but English is too difficult for us to speak.* (※ But から始まる文章を結合)

So I will be able to Speak English.

I will go to America for be super cutman in America.*

→ *I will go to America to be a super hairstylist there.*

Let's go America.*

→ *Let's go to America.*

B-6. It has long be my dream to travel abroad, Going to the America.*

→ *It has long been my dream to travel abroad to America.*

I eat a hot dog in America.

I eat popcorn in America.

B-7. I want to be a hairdresser who is loved by a lot of people in the world.

I want to be able to speak English to come in contact with a foreigner.*

→ *I want to be able to speak English to communicate with foreigners.*

I want to establish my beauty salon in foreign country if I can do it.*

→ *I want to establish my beauty salon in a foreign country, if I can do it.*

B-8. I want to speak English.

B-9. My dream is to go to the London.*

→ *My dream is to go to London.*

My dream is good speak English.*

→ *My dream is to speak English well.*

My dream is live in London.*

→ *My Dream is to live in London.*

2.4.C. 事例C 原文抜粋 — タイトル “My Dream”, 副題 (Hairstylist) あり, 5W1H 解説あり.

(番号) (文章内容)

C -1. I want to be hairstylist in foreign.*

Because I interest to foreign culture.*

→ *I want to be a hairstylist in a foreign country, because I am interested in foreign cultures.* (※上記の2文章を訂正して結合)

C-2. I will want to work also overseas, if there is a chance.*

→ *I also want to work overseas, if there is a chance.*

C-3. I want to go abroad to learn many techniques.

C-4. I want to work also in foreign countries some time.*

→ *I also want to work in foreign countries sometime.*

C-5. I want to work after ten years in America.*

→ *I want to work in America in ten years.*

C-6. My dreams where London is shop open.*

→ *My dreams is to open my shop in London.*

C-7. I like to be Mr. Vidal Sassoon.*

→ *I would like to be Mr. Vidal Sassoon.*

C-8. Sometime, work in foreign countries.*

→ *One day, I want to work in foreign countries.*

C-9. I want to be world activity hair stylist.*

→ *I want to be a world-active hairstylist.*

2.5. 結果考察

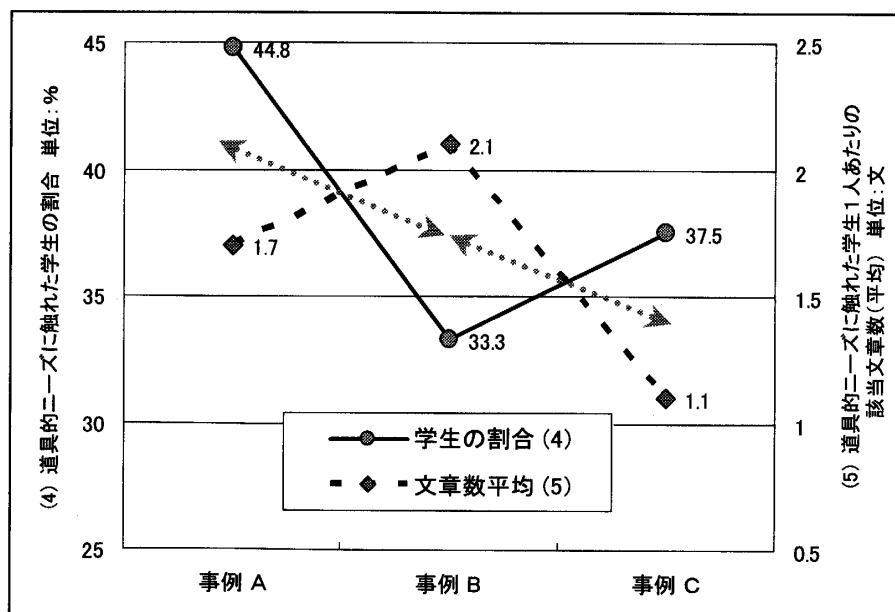
以上の事例A～Cの原文の抜粋をもとに、今回の比較考察に係る事柄について、数値的（量的）な視点と質的な視点の両側面から考察する。はじめに、今回の調査から得られた数値(1)～(5)を次表に整理する。

◇図表2.5.1 調査結果数値

	内 容	事例A	事例B	事例C
(1)	対象学生数（サンプルスピーチの総数）	29人	27人	24人
(2)	道具的ニーズに触れた「学生数」	13人	9人	9人
(3)	道具的ニーズに関連する「英文の総数」	22文	19文	10文
(4)	(1)の対象学生数における(2)の割合 計算式： $(2) \div (1) \times 100 = \text{割合}$ （単位：％）	44.8%	33.3%	37.5%
(5)	(2)の学生一人あたりの(3)の文章数平均値 計算式： $(3) \div (2) = \text{平均値}$ （単位：文）	1.7文	2.1文	1.1文

事例A～Cの実施条件が学生のスピーチ文に影響を及ぼすという前提においては、(4)と(5)の数値はその影響度を測る上で参考になりえる。例えば、(4)の数値は、いかに多くの学生に「道具的ニーズ」に関する記述に触れさせることが出来たかを示す指標となる。また(5)の数値は、(4)で対象となった学生に、いかに多くの関連文章を記述させることが出来たかを示している。これら(4)と(5)が表す相関関係の傾向を明確にするため、各数値をグラフにしたものが次の図表である。

◇図表2.5.2 「道具的ニーズ」に触れた学生数とその学生一人あたりの該当文章数の平均値



※註：◀……▶は、各事例における(4)と(5)の間を結ぶ平均的な傾向を示す参考線。

量的な視点から事例A～Cの数値結果を純粹に比較した場合、以下のような傾向を見ることができる。

- (イ) 全学生を対象とした場合、スピーチ内で「道具的ニーズ」に触れた学生の割合が最も多いのは事例Aで、最も少ないのは事例Bであった。
 - (ロ) 対象を「道具的ニーズに触れた学生」に限定した場合、道具的ニーズに関連する文章を最も多く含んだのは事例Bであり、最も少ないのは事例Cであった。
 - (ハ) 事例A～Cにおいて、「道具的ニーズ」に触れる学生の割合と、彼らの道具的ニーズに関する記述量の相関関係は、一貫した共通傾向にはなく、事例Bの位置関係のみが逆転する現象を示した。
- (ニ) 「図表2.5.2」の◀……▶で示した「各事例における(4)と(5)の間を結ぶ平均的な傾向を示す参考線」は、最も高い「事例A」から最も低い「事例C」へと直線的に推移した。

次に、この数値的な観測をもとに、各実践事例で抜粋された実際の英文やスピーチ全般における質的側面についても触れ、「数値」だけでは測れない各実践事例の特徴や傾向を補足したい。

まず実践事例Aについては、考察対象として転載した13人・22文のうち、12人・18文で“I want to ～”を用いた表現が見られた。この傾向は、他の事例B・Cと比較しても最も顕著である。平易な表現を用いて、スピーチのほとんどを箇条書きで構成するのが事例Aの29人の大勢に共通する傾向であった。また、スピーチを構成する各文章のつながりに関しても、思いつく内容を思いつくままに列記したような記述が多く、ひとつの話題に対する推敲や、自分の主張を“肉付け”する話題（併記文章）が少ないのも事例Aの全般的な特徴であった。その反面、こうして比較的気軽に書き綴るスタイルがもたらすメリットもある。それは「図表2.5.2」が示す通り、「道具的ニーズ」に触れた学生数が最も多かった点である。事例A全般としては表層的な記述に終始した傾向にはあるものの、このメリットは、“My Dream”という漠然としたトピックがもたらした「余地・自由度」の効用であると考えられる。

実践事例Bについては、他の事例A・Cと比較して「道具的ニーズ」に触れた人数は少ないながらも、そのスピーチ1点あたりの道具的ニーズに関わる文章量が最も多くなる傾向を示した。事例Bの実施にあたっては、事前に「5W1H」を“復習”させ、スピーチの中で自らの主張に説得性を持たせる構成の必要性を説いた。これにより、例えばB-5・B-6・B-7の例文に見られるように、「なぜ」そうしたいのか、その結果「何を」したいのか、のようにいわば主張を“肉付け”する記述が増えたことによって、一人あたりの「道具的ニーズに触れる文章」の割合が高まったものと考えられる。一方、実践事例Aと比較して「道具的ニーズに触れた学生の割合」が大きく減少した要因としては、道具的ニーズとの関わりが比較的薄い話題（国家試験合格、職業選択動機、結婚、サロン開業など）を述べる際、各自の主張を5W1Hに沿って詳

述するあまり、道具的ニーズに関する記述に触れるまでもなく、スピーチの規定量（最低10行）を満たしてしまっただけに一因があると推測される。実践事例Bにおける現実的な課題としては、「道具的ニーズへの意識喚起」を意図して“My Dream”スピーチを導入するならば、「将来、英語をどのように生かしたいか」という領域について触れるよう、学生に直接的な指示を与えることが求められるだろう。

実践事例Cについては、事例Aと類似する相関関係を示しながらも、道具的ニーズに触れた学生の割合や、道具的ニーズに該当する文章数は、いずれも低い水準にとどまった。特に「図表5.2.1」の(5)に関しては、3事例中で最低の数値を示している。事例Bとの実践条件の違いが「副題の有無」のみであることから、事例Cに見られる特徴的な傾向は、「副題が与える影響の大きさ」にあると言える。今回、事例Cに関わった全学生の24本のスピーチでは、「技術者としての理想像」や「サロン経営の理想像」といった、具体的かつ現実的な未来像を語った内容が多くを占めた。先に事例Bの補足で述べたのと同様に、「いつ、どこで、どのようなサロンを持ちたいか」や「どのような技術を、誰に、どこで、どうやって提供したいか」といった具体的な“肉付け”の記述によって、スピーチの規定量が満たされた傾向にある。また、「図表2.5.2」における“平均値の参考線 (◀……▶)”を根拠に、「事例Cは、事例Aと類似の相関関係にあってもその達成水準は低い」という考察に至る前には、それらの質的内容の比較にも注目する必要があるだろう。具体的に例示すれば、事例Aにおいて多くを占めた「思いのままの箇条書き」の傾向が、事例Cでは減少している点が挙げられる。橋本(1988)の言う「用意周到に想を練り、所定の時間内で最大の目的達成の効果を得るように推敲を重ねながら、『メッセージ』を構築する¹¹⁾」という public speaking の使命に照らすならば、事例Aよりも事例Cのほうが、本来の“English speech”の導入目的に近づけたことを意味するとも考えられるだろう。

まとめ

本稿の調査では、課題となる“My Dream”スピーチの課題提示における助言や副題の有無により、結果として学生が発表するスピーチ内容の傾向には変化が見られることがわかった。たとえ指導者からのアドバイスや具体的な副題が与えられても、それらがそのまま、より多くの学生のスピーチにおいて「道具的ニーズ」の記述に直結するという傾向は見られなかった。むしろ、養成施設での実務英語教育においては、“My Dream”のような漠然としたトピックのもと、細かな指示や副題を与えずに「英語スピーチを自由に楽しませる」ことが、結果的には道具的ニーズに関する学生からの自発的な発表を引き出す可能性が示された。本調査では、スピーチ作成に際して指導者が具体的な指示を与えたり副題を指定したりすることは、スピーチで「道具的ニーズ」に触れる学生の割合を減少させる傾向が示された反面、主張内容の具体性

や説得性という観点においては、英語スピーチ自体の完成度は高くなる傾向がうかがえた。

こうした調査結果はまた、実務英語教育の現場において英語スピーチを導入する際、何を目的に英語スピーチ訓練を採用し、どのように実践すべきなのかを、指導者が実施機会ごとに十分に認識する必要性を示している。たとえば、必ずしも一般的には推奨されない「漠然としたタイトル」を採用することも、その目的次第では効果的な結果につながることもある。いずれの場合においても、スピーチ自体の導入目的に関連したトピックを選定する必要があることは言うまでもない。実務英語教育における英語スピーチ訓練の導入に際し、指導者は、スピーチの導入に求める教育効果を意識し、その副題の有無やスピーチ作成に関する指導方法について、より深い興味と検討を加えたい。

とりわけ、学生の英語運用能力に大きなばらつきを抱える養成施設での ESP 教育においては、大谷 (2001) が推奨するように、レベル別のクラス分けとレベルに応じた指導案¹²⁾の実現が理想的ではある。しかしながら、筆者が ESP 教育に携わる旭校を含め、レベル別クラス分けが実現困難な養成施設も存在する。今回の調査結果を踏まえた英語スピーチ訓練の実践方略を探るとき、多様な英語力がひとつのクラス内に混在する教育環境では、たとえば (同一クラス内において) 初級学習者には「事例 A」で自由な発表を促しつつ、中級～上級学習者には「事例 C」で具体的な発表を勧める、といった折衷案の応用を試みることも可能である。ひとつのクラス (同一グループ) を対象に、事例 A～C の異なる実践モデルを混在させた際の導入効果については、今後の研究課題となろう。

ほとんどの実務英語学習者にとって、英語は実務遂行のための「道具」である。同時に、実務英語教育において英語スピーチを導入する最も基本的な意義もまた、英語を「道具」(媒介) として、みずからの意思を英語で公に伝えることにある。理容師美容師養成施設での実務英語教育における英語スピーチ訓練の導入にあたっては、英語スピーチと実務英語との根本的な接点が「道具的ニーズ」であることを常に意識して臨みたい。

註

- 1) 三熊祥文 (2003) 『英語スピーキング学習論』三修社, pp. 55-82.
- 2) 吉田研作 (1997) 「自己表現力と対話力の育成について」鈴木佑治 吉田研作 霜崎實 田中茂範『コミュニケーションとしての英語教育論』アルク, p. 225.
- 3) Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*, Oxford University Press, p. 11.
- 4) Grice, George L. & John F. Skinner (2001) *Mastering Public Speaking*, 4th ed., Allyn & Bacon, pp. 5-7.
- 5) 野村和宏 (2002) 「パブリックスピーキングを構成する要素と授業実践」JACET (大学英語教育学会) オーラル・コミュニケーション研究会 編『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』三修社, pp. 13-14.
- 6) 学校法人長谷川学園 旭理容美容専門学校 (厚生労働大臣認可校) 三重県津市.
- 7) Otani, K. (2003) Designing an English Course for Prospective Hairstylists 『山野研究紀要』11号, 山野美容芸術短期大学, p. 46.

- 8) 大谷加代子 (2001) 「美容を学ぶ短大一年生の英語基礎学力と英語に関する意識調査」『山野研究紀要』9号, 山野美容芸術短期大学, p. 48.
- 9) Otani, K. (2003) *Designing an English Course for Prospective Hairstylists*, p. 46.
- 10) 近江誠 (1996) 『英語コミュニケーションの理論と実際』研究社出版, p. 246.
- 11) 橋本満弘 (1988) 『英語コミュニケーション論』学書房出版, p. 166.
- 12) 大谷加代子 (2001) 「美容を学ぶ短大一年生の英語基礎学力と英語に関する意識調査」 p. 49.

(ESP; Speech Communication, 実務英語教育・スピーチコミュニケーション)